

1月3日「希望はあるか？」マタイ2：13～23

2021年、明けましておめでとうございます。新しい年の礼拝を、愛する兄弟姉妹の皆さんと一緒に迎えられる恵みを心から感謝します。新年が明けて、まず私たちは何をするのでしょうか？抱負を立てる人は多いかと思えます。私は今年は「祈ろう！」にしたいと思えます。コロナ禍のなかで、人間の予定や思惑通りには行かないことがあると昨年気づかされました。祈りの中で、求めるべきものと、諦めるべきことを神さまの声に真摯に聴きながら、見極めていきたいと願っています。

今日は、聖書からは昨年を引き続き、クリスマスの物語を聞きました。それはあまり新年には相応しくないとと思われる方もおられたかもしれません。時の為政者ヘロデによって、救い主イエスは命を狙われます。父ヨセフは幼子イエスと出産を終えたばかりで弱りきった妻マリアを抱えてエジプトへと危険な旅をしなければならなくなりました。そして、学者達から騙されたと知って怒ったヘロデによって大勢の罪なき子どもたちが犠牲になったことを聖書は伝えています。

この出来事が史実であるかどうかはあまり定かではありません。救い主イエスの誕生とエジプトからイスラエルの人々を救い出したモーセの生い立ちが物語として重ねられているだけだという研究者もいます。けれど、ヘロデが非常に残忍であったことは知られていて、彼は自分の地位を守るために、親族や妻、果てには3人の息子達もすべて手にかけてしまうような恐ろしい人間だったことは事実として知られています。クリスマス、御子の誕生というまばゆい光の裏には、支配者に振り回されるか弱い者たちの痛みと陰惨で残酷な人間の深い深い闇があったとマタイは伝えているのです。

マタイはこの出来事を預言者エレミヤの言葉の成就だと考えました。18節「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子どもたちのことで泣き、慰めてもらおうともしない。子供たちはもういないから・・・」預言者エレミヤは紀元前627年からおよそ40年間、南王国ユダで預言

した人物です。彼は涙の預言者と呼ばれていますが、それは彼が生きたのが南王国ユダが滅びへと向かう最も国が混乱し、悲しみに暮れた時代だからです。エレミヤはユダの国が大国の脅威にさらされる中で一生懸命人々に悔い改めて神さまに向きなおすように説きます。けれども彼の主張は聞かれることがなく、むしろ迫害を受けます。そしてバビロニア帝国によってエルサレムの町や神殿が破壊され、仲間たちが大勢殺され、捕えられて連れて行かれる光景を目にしなければなりません。その光景を見てエレミヤは預言するのです。「**ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子どもたちのことで泣き、慰めてもらおうともしない。子供たちはもういないから・・・**」ラケルという名前はお聞きになったことがあるでしょうか？創世記に登場するイスラエルの族長であるヤコブの妻でイスラエル民族の母親になった人物です。彼女が嘆き悲しんでいます。それは彼女の息子たちが（つまり、イスラエルの諸部族が）バビロニアに滅ぼされ、連れ去られてしまったからです。その声はラマから響き渡ります。ラマは、ユダの人々が他国へと連行されていくときに通らされた場所なのです。イスラエルの国が滅ぼされた光景を見ながらエレミヤはイスラエルの母ラケルが泣いていると表現しました。同じように、国中で悲しみ嘆く母たちが大勢いたことでしょう。マタイはこの預言を引用しながら、この世界の闇、世界で一番最初に傷つく最も弱い子どもや女性達の存在を伝えているのかもしれませんが。この世界の一番深い闇のどん底にいる人達です。

けれども、エレミヤの預言にはまだ続きがあるのです。「泣き止むがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰ってくる！」国を失い、人々を連れ去られ絶望している人々にエレミヤは神様の希望の言葉も伝えたのです。泣くのをやめなさい。絶対に諦めてはいけない。いつか連れ去られた人々は帰ってくる！未来には希望がある、と。神さまはこの世界を創造された方です。エジプトで奴隷となっていたイスラエルの人達を助け出して下さった方です。この方がイスラエルの人達を必ず救い

出して下さるはずだから、たとえ今どれほど辛くとも泣いてはいけない！希望を捨ててはいけない！エレミヤはそう伝えたのでした。バビロニアに滅ぼされ、ボロボロにされたイスラエルの人達を支えたのはエレミヤが語ったこの希望でした。マタイの福音書もヘロデによって迫害された人々の中に生き延びた人達がいたことを伝えます。そう、救い主イエスです。迫害され、命の危険にさらされ、故郷を追われた人たちの中からすべての人を照らす光が、救い主がやってくるのです！

昨年のNHKの朝の連続ドラマ「エール」。福島出身の作曲家で昭和の名曲を数々生み出した古山祐一氏の物語でした。彼と妻の音さんは熱心な聖公会の信徒の方だったようで、教会界限でも話題になっていたので年末に再放送や総集編を見ました。「長崎の鐘」を作曲したエピソードがとても印象的でした。「長崎の鐘」作曲のため、歌詞の元になった本の著者・永田武（吉岡秀隆）医師に会いに長崎へ向かった裕一（窪田正孝）。長崎は焦土と化し、生き残った人たちは家も愛する家族や友人も、何もかも失っています。「神様はほんとにいるのですか？」と問う若者に、「どん底まで落ちろ」と答えたという永田。なぜ彼はその若者に追い打ちをかけるような言葉をかけたのか。その理由を、裕一は長崎の地でずっと考え続けます。そんな裕一を見兼ね、永田は妹のユリカ（中村ゆり）に、裕一をある場所に案内するよう促します。そこは原爆投下直後、永田が怪我人の治療にあたった場所でした。皮膚が焼けただれ、飛んできたガラスが足や腕に刺さった人たち。自分自身も原爆で親を亡くしてもなお、凄惨な現場で永田医師は歯を食いしばって戦った。壁の裏には、その時に永田が記した「どん底に大地あり」という言葉が残されている。長崎市・浦上天主堂で奇跡的に瓦礫の中から鐘楼が見つかります。永田医師は生き残った人々と一緒に瓦礫から引っ張り出した鐘を、その年のクリスマスに初めて鳴らしました。妹のユリカは当時を、「あの時の感動は一生忘れません。鐘の音が私たちに生きる勇気を与えてくれました」と振り返る。裕一はそれを聞き、ようやく永田が若者にかけた「どん底まで落ちろ」という言葉の意味を理解することができます。「神の存在を問うた若者のように、なぜ、どうしてと自分の身

を振り返っているうちは、希望は持てない。どん底まで落ちて、大地を踏みしめ、共に頑張れる仲間がいて、初めて真の希望が生まれる。」

昨年から続くコロナ禍のなかで私たちは新年を迎えました。私もこの正月は県外のどちらの実家にも帰ることができず、少し寂しい正月を過ごしました。もちろん電話などで「おめでとう」と言葉を交わしますが、何となくお互いに遠慮があるようにも思えます。ニュースでは感染の爆発的に増加と医療の逼迫も伝えられています。見えない不安や寂しさのなかでこの新年を迎えた方もおられるのではないのでしょうか。「希望はあるのか？」そんな疑問から始まった新年に思えます。今日の聖書は語っています。「希望はある！」エレミヤの預言から、人々がイスラエルの国に帰ってくるまで、50年も待たなければなりませんでしたが。救い主が何とか難を逃れて、成長して働きを始めるまで人々は30年も待たなければなりませんでしたが。それでも希望は確かにあるのです。「あなたの未来には、希望はある」神さまは確かにそう語りかけてくださるのです。